春色籬の梅

九

208
15
693

国立国会図書館　　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

208
15
693

国立国会図書館　　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

かぞのかんのこまり里

業の名は
玉匱保赤圓

一包 二百銅
半包 百銅
小包 五十銅

そもくこの御業は小児花を甚育なふにはなくて
かなはぬ丸業なり凡小児に用ゆる業昔より世の中に
多くといへた唯当世のぎの業法にて後この
為に空らぶ子に症に依ては匂ひの高い丸業は
却て病にさはり苦しきをまするもあり医者は
既にその意を云ふなるべきや当に予が
家は先祖よりして小児科を業とし種々の
妙業代調へて億万の小児の病ひを
治する経験あまたなり其中にもこの
保赤圓は代家に無数の良業にて小児救命の
最第一とは殊にこの業は食物法業にさし合なく

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

小児寒疝の病の妙方あり。さまざま薬の即功あるも、さし一小児方の苦痛をさやく除んと我がのみ
牙一〇えんきやうぶつたいどくさう。ばうふうびやう。
〇よろれいぐ〇かつこんぢ〇そく〇そくつめ〇
〇物かぐろく死をさく〇そちくとふく〇そちくぎれのさしきあるたぐひ〇みぞおちかたまりあり
す下ゆく日くふやせあさう〇さおりくて物がいそぐひ
〇あつひやあ役のばうぐどころく〇めをさぢてひ
〇そなめの下をのぞり〇爪をかむ〇ちんぞう成りぞ
つちのたぐひ成合ー〇そなめの下あく〇ようさ成なぐー〇
〇つもりふかあめぐ死りのせきど〇きみぢくさ
四あつひやそく〇ちくはりてたきくり〇ち
小児一切のやまひのちひてたくふ功能あるのうち
の名小半るめ妻けまだあくはぬきいるぐひそ正ふ
事実の位あるそ成めき寺ゆ死が須町の風雅人
いと古く小児の病を癒治し救ひさる良薬なれども
のこころそ楽のの中るさでて成此るえさす
小児の病ひ成者くすくひ病るうるさでも元の
おいまこびまりくもみひるる死ひ小孤それども位
ぐふひいむ力成うふむるはぬがへーの虫乳ともあ
剛利欲をねまざる加須の法験成解治ら
あつらく世ふせ豆虫あふ小児元の十こやくふ
病ふうーこ之ぐ親元さちの寿命成も延
らぐもものぢ善いつつりぞうる成ち

◎近頃流行成る所為十方ふ多くのびまも功能
の名小半るめ妻けまだあくはぬきいるぐひそ正ふ
事実の位あるそ成めき寺ゆ死が須町の風雅人
いと古く小児の病を癒治し救ひさる良薬なれども
のこころそ楽のの中るさでて成此るえさす
小児の病ひ成者くすくひ病るうるさでも元の
おいまこびまりくもみひるる死ひ小孤それども位
ぐふひいむ力成うふむるはぬがへーの虫乳ともあ
剛利欲をねまざる加須の法験成解治ら
あつらく世ふせ豆虫あふ小児元の十こやくふ
病ふうーこ之ぐ親元さちの寿命成も延
らぐもものぢ善いつつりぞうる成ち

▲右ふもろくやき病疱の小児元親族也方ふわくびのふ不及化人の小児ぢり

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

このごろのふでの寡に春水がすゝめて記させまゐらせし草紙をよみませ給ふ御方に申あげ
自他至宝の善事をさまく欲するなり小児さま方がと懇にかゝる
御人に告知せ奉らんとて謹で記ひまゐらするものなり

江戸 狂訓亭主人為永春水誌

御免 製薬所

小児科

武州埼玉郡加須町 大和氏門司法橋精製

京都堺町六角下ル 吉野屋勘兵衛
大坂心斎橋筋二丁目 播磨屋弥七
江戸横山町二丁目 松本屋長蔵
同本町三丁目 近江屋茂兵衛
江戸本町二丁目 本田屋武兵衛
小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛
同室町二丁目 須原屋八右衛門
同小網町二丁目 丸屋甚作
浅草茅町 村田安右衛門
江戸小舟町壱丁目 大坂屋源助
同伊勢町 万屋八郎兵衛
江州日野大久保町 □村市右衛門

春色籬の梅巻之九

江戸 為永春水著

第十七回

たのしく帰る我家の門に関守はなけれども心ぐるしとて前後を気がねはお民の身のみかは風の柳のなよなよと会釈もしらぬ面目なく庭の板戸の娵の縁家内の様子を伺へば路次を入来る小僧の手燈さし来て手招きし
小「ヘイお帰りなさいまし
鳥「本店の祖母さんが
鳥雛「ヲイ

来てお左衛来ハ居るひか　小「イエ今朝ゆど市内宮さんを
陣に出ハさいまして其居人ひらッ居やいまして　鳥「ヲヤそれ
ぢやア奥にハ誰も居るひのか　小「ヘイイエ市内宮さんの市姉
さんがお留守居で御座まれ　鳥「ヲヤお然さんがく　小「イエ
ナニ市屋家にお左るさ行て市姉上さんごと中夏でおぎゐ
まれが室に貴君がお嫁御成そゐる美栗女の市姉上さんで
どざるまれ　鳥「ハ〳〵又お株で可笑変を いいア実正に女が
来て居るのかお花だかり居るのどろへ　小「イエナニお内宮さんハ

マガキ九ノ一

市祖母さんと其居人お出るすかさに遠ひどざるません　鳥「左
様かそれでもお花に手根姉さんハるひたがざがノ少アア行
にしても猶ほうら出りて此座の開きを明て呉る　小「ヘイト
小僧の手香ハ猶ほの方より様側傳ひ座の戸明て見せへ
行く鳥雅ハ座より我居るへ居りかに這入まバ次のなさり
菓を汲来りてさし出し　女「お帰りなさるまして三ト完食ゆ
頼見てどッかり鳥雅ハ呆れ　鳥「落雲かへ行様して三ト此宅へ
来て呉たのご至ト四隅を見廻し　鳥「此身ハ就にでも化

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

国立国会図書館　春色雛之梅 15巻 208-693

ガラス使用

萬々の相談して異まてゐる始末をくまくしくまゐ鳥ヲヤ
左様ゐそまでまゐりたが又お茶の爺ざんの方ハなんと
言て出て来たのぞ昔ハ兎も角も今ぞハ物思ひ爺
ざんぶから只居理もまゐらぬ形して来て居てハ浪そふ
もなひものぞノウ　うまへ　ナアニそまでもアノ當時さしかつて
何とも不言と宜ぶざゐ　まゐヨお花さんと以前から姉
妹の様に勿易くして居たから病氣を保養のために
出宿に来て居るつもりに仕まゐしまた此所をお茶

マガキ九ノ三

さんのお家ぶらさハ爺さんに和らせハ仕返せんヨそして手
中に爺ざんハ仕入の行物が揃ひさへすまバ田舎の実
家へ帰りて半年の余も上列に居るンでぶざゐまゐから
左様とりと稲戸の別荘へお花さんをも連て行て二人で
遊んで居まゐヨ　鳥へ　アハ　相談ぶ　氣楽な事ぶり
言ひて居るノウ　左様して見なく此家の留守居ぶなひから
此身が何所へも出る事が出来なくなりハナ　「ヲヤ　お茶
さんハ何所へも行ぬと宜ぶざゐまゐヨ私とお花さんと

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

マガキ九

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

ゑりぐ蒸電がりて上まほから　島へ　そまぐりても用がある
のに外へ出るに居るまるものうナ　イエエウ　外の用ハ足
さぐると宜ござゐまほヨ行でも男が外の用といふのハ十ヲが
九ツ　空でおざゐまほハ主電吉ハ私が多満屋に居る何か
お茶さんが空を仕ちやア出て私の方へだりお出ぢやアなり
ませんかそまぐから今でも用があるといひてお花さんを
欺かして家内を出て婦多川の用だりと足てお主茶で
ござゐまほハまほからハお花さんと私と二個かつてこうから

去根に欺かさまてだりと居ハ仕ゐせんヨト笑ひを含まて
電数のとがらくどとき姫ゑすハ鳥雅もさほがぐるやくと
なり元木うう木の差別なく小濱の顔と同じくて年ハ
二ツも男なし隋雲おあらん育ちの和らか泉ハ喫女　私
なるこそ強きよりまこと電らしき所もなりて其の中にその
品を競べて見まゝバお花ハまこと浪の風に喫女の花美を兼
てそなるに品ものとまゝがと思へバ温厚なるてかし気活り
なる遠慮ありさらまして小濱ハ年といひ苦労も余計に

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

諸夏、勇ゐる如き なるべきる古今のまとり四十八まも何の
その秘術を極めし一個の美人甲乙あらぬ三幅射殊にいづ
まとも貞節なるそもいく鳥獣の花生にいりなる善根を植
立てうる美人を得ずりけん志りし樂で婬せざる君子
の德を備へば人ちぬ身命を失ふ基なるべし
るゝあるハおよそだぬものよ峯の花　松川亭門葉　屬水春友
外面如菩薩内心如夜叉なるべしとも美人ハ男子のたゞ
なるべし必ずしも美しく　うるハ夏なる美女もまた姿の花の

フガキ九ノ六

美しきを自慢して心の中の様まてうるを他人ハ知らぬと思ふ
夏なるれ鳴呼真の美人ハ稀なるかな　鳥獣さん茶
根ヲ實正にお花さんをバ慈愛がりて　お上げ成ヲ左
根ヤスと私の猜手から言根でどざるまほが　何根も私の
所へ来てお呉の心変の夏なんぞと　いふハ寛に極云から
なきし以亂でなけまバ形して呉まられハ仕ませんヨそして
お前さんの夏を大切に思ひて　お主の深ひといふものハなく
私なんぞのおよぶ夏ちやア　あるまませんハ実正にお花さんを

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

澤山そなよお思ひごとを翁がおとうまはハ　鳥「ハイ〳〵　菓和汝し
ましたは異見通りにいたしませうあらし　極実の女房の様に
大事にすることハ出来るひヨ　「ヲヤ実正のお内宝さんとハエ
鳥「此嬢の変サト　浮雲の様をちトハ此と拵まて実　「ヲヤ〳〵
祇加減なことをお言なさいナ　お茶さんの私でハ子ト無理視て
笑つて居る　鳥「此身の私でハ何様しことといふのぞ　「ヲヤ〳〵　小
演さんが一番荒型どざゐませうよ　鳥「ナア二何様して大遠ぞ
ぜんまハいたが空復なつて花と早くお飯を給ひ　「ヲヤ左様で

此位産まほか立膳がとしらへてありまほが今お茶を入てあげね
せう子ト立ちまハ鳥雅ハ気のなかう　鳥「お茶が為ぞとも諸
菊さんにでも頼まなく　「ヲヤ〳〵二階のつもりでうへ　ホン二諸
菊さんといへバお袖さんが稲子の宅へ此る多をよとして空へて
鳥雅さんと和合しておまでごらふから鳥雅さんへも冥くゆてト云
てよとしましたハ彼嬢さちまで左様思ひて呉まほのにお茶さんハ
何程以来の意人にお逢ごろといつて余り晴がるひなへ　鳥「コレサ
子ハ飯をたらべさせるがら思ふや眼を言て呉なく空復ッて挨拶も

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

マガキ九ノ十

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

中まいくこヨ事ニ〻〻宮にまゐ お楽さんに此二も遠ひハ多ひ根に見
上まいしたらう其位挨拶をいたしまいこ 其式ハ〻〻今日は限りて
変ても多ひ無度無数りしゆうら人遠ひ者たり無相せするのご
ありし お楽と見遠る程に此儀が似て居るから此身も安心ご下
見より お金に喜付て酒食の用意なごをさせ彼是と孔を
志るゞら 其ハトキニ今朝ちよろこゝあるこ お楽の身の上両方に
まゐぞといふ尚古もなりけまご此身が子に遠ひもなし手身も
聞覚へて居る実親の以前の噂大概ゆゑもあるこらふが嫁に選

アガキ 九ナ十二

ゆゑ安坊するごらふから早く名射西根と思ひて招いごのごが此
身が当守に他所へ出者に行くこといふから今に誰ぞ使を出して
呼寄るからアゆるやうを拝がいく左根して嫁に逢てまゐ方の
心も落着たら辰巳の方ハ直に金を出して掛合ひ対て出る
根にするヨ ハイ所がこの十二子実ハ彼地に出動て居まゐのハ
私の勝手に勤て居るこで所まゐから何日何時引籠なとも自
由になりまゐヨ 其ハア左根にそまぢやア程のなり此二も早く此方
へ来てアア当分他の事雑を仕るひ根に嫁と同居に居るがゆゑ

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

マガキ 九ノ十三

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

ハナ 小「実正に左様ごと何様に嬉しふぞゐませう早く嫁に
逢度ものでござゐまはしたるの所人本女のお金が次のあるから
金「アノウ新孝さんが来ましたら 老「ヤ左様か調度よろうこと此方
へお出と左様言ふ 金「ハイト揚る人行るもなく兼て仕易く出
入まる楼川新孝 新「ヘイ具那今日ハト産養の入口に首を不て
礼義を仕るから小演を見て 新「イヤこれハ小演さんでござゐまはす
此る中お噂をちらゆうと兼りましたが未お尋ヤもいらしません
今日ハ祇此方へお出成ました 小「ハイ久しくお目にかゝりませんが

毎度市元気で能ね人 老「イヤ新孝さん今人がなくなって困りて
居る所ごト小演の身の上などすべての支を委しく新孝に
物語りけれバ 新「イヤ不是ハマア誠にお目出度支でござゐまは
左様ならバお条さんのみに小演さんハ実正の姉上さんでござゐま
きす 小「新孝さん私をやチ嬉しく何でも角も
言様のなひやご姉しひヨ 新「そのようでは出来ましたのサ便のなひ
様に思ひてお事は成に所で実の父親さんにお逢ひ然成のこと
ならば無筋の内妹女にもお逢なさる様に成ことので出来ましたら

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

うら是がお嬉しくなる所ではない涙ませんでよ 小「アヽ宮にはもやく
顔が見度ヨ 其「平コウ 新孝さん何卒今ツからお粂の迎ひに行
て呉なく 新「立そまはハモウ早速に乗じませう此様に内閣出度
と 皇に恋びまをきらして居てハなりません 事にお迎ひに乗ります
せうがお出成と其家ハ何所でござるまほう 其「立往と所ハお
金が委しく聞て居たから咬に聞て行て呉なく 新「立左様でど
ざるまほうそまぢやア真に乗じませう 氣輕に立て新孝ハ
勝手にはこり彼お金に落雲の行ふる先のるの我くすしく聞て

マガキ九ノ十五

行我洗し小袋に入り 新「又そまでじやア お粂さんのお出成なる
所ハ鳥雅さんの所で迎ひに来て先達中から相談を仕出成と
のが鳥雅さんの内閣宮さんでその内閣宮さんが此家のお粂
さんを味方に抱込で小濱さんの方へ鳥雅さんを差すまのよふ
筭ばかり 金「左様サ何でもまづそのお粂さんといふお方が
お出成と節お粂さんと内両人で種々相談を任しこのでござる
まほト聞てさほうの新孝も途方に入まてるお粂の行先まづ
きし當門て鳥雅の身の上當時の女房お粂といふも岩体な

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

らぬ中なりと共兼て知つたる事といひまたこれ奈をばまた仮称
鳥雅にすゝめて逢せし縁も他人のすゝる所為ゆへあらぬ
小演は鳥雅が初終の情人容色我いへば二人が三幅対の
美人なり又三人のこと中に他人のおもひは薄雲と姉妹同様の
親しきにかなりし拍子であるのこゝろ本家といひ大なるの祖母と
敬いなく人の心に叶ひ親類一同兼知の本妻小演は古き別
際のなの薄雲とは実の姉妹何れをいづれと定めを付て上
ゆをこゝける事もなるまじと思案にあぐこゝろけれどもまづ

アカキナノ十六

お奈に小演を逢せ親身の姿のりをさせて上納りたるもある
べしと鳥雅の評合なりしに行ひそうに鳥雅と相談すれば鳥
雅は呆れて不当の付方もなく其夜は何といふことけも彼甚
お奈を新孝に付ひ世智慧めて稲戸の別荘へ帰せしが
兎でも自身に弟夏の始末我付るゝ時なければ早速お熊の
評へ次第て小演と薄雲の落着を頼ゝけれどお熊も即
座の思案に出来かね梅里とも相談を遂て鳥雅にハ手賀
代とお熊の安堵我ならハ梅里お熊の夫婦は稲戸へ行て

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

新孝を仲人に頼て其三郎に内諾をなしけるが理屈を付て
見るを極むづかしき節なれども互に男を思ふ心の深くして
生得なさしき人になれば お絲のさしづに随ひ小濱とお粂は
稲戸に同居して勝の別荘の賣家となりしを幸ひに買
調へ鳥雅は祖母とお花を連て隠居し其三郎は國元の遊
養子を以て継せもつとも身上の賊半分を鎌倉にありしを
鳥雅の家に入て其妃人に任せ手身は後見となりて隠居同
様の楽をなし小濱お粂 お花の三人の中は少しも隔心なく

睦ましくして朝夕に拝びくらし鳥雅とは何れが太子妾
妾とのみ位付も出来ぬ様に和合し程なく三女が同じ
月頃より任身して十月の後に三女ともめでたく安産
しければ小濱の産し子をもつて其所とし お粂の産し
子は隠居所の跡とりと定め お花の産なる子は其本家の
養子となり何れも無病息者に成長し楽しみなる吉
のに續きしとぞまた千賀代お玉は忠と忠と同居して睦ま
しくさまでも千賀代は子を産なるありし西京お玉の産なる

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

子を貰ひ母屋の裏に別宅して一生残る事しとぞされバ梅里お鶴ハ子しも如ようる事なく諸方の妹分に数ハれて歳子代めでたく事へしハ最も嬉しき縁なりと聞伝へて書残しける草紙を新に増補してこれに同世度筆残洗め伝つるぬ

○作者同此草紙ハ猶書ものせしまと多くあり何故とその理を自地にハ告ぐこけまバ遠に不言彼是障ることのあるを以て思ふ程をあらハ見よしなく

この後の著編ハ何までも茲向風俗を改め暫て美くハ教訓古風の体裁第一とし又小演が美の判断をバくもしくせしそハ薄雲と二枝の兄弟なるよしを花の精にあるぞらへし小説の旨と案じたる人拾遺の巻を綴る日あらバ婦女子の為に細評なるべしといへ

春色籬の梅巻之九了

208
15
693

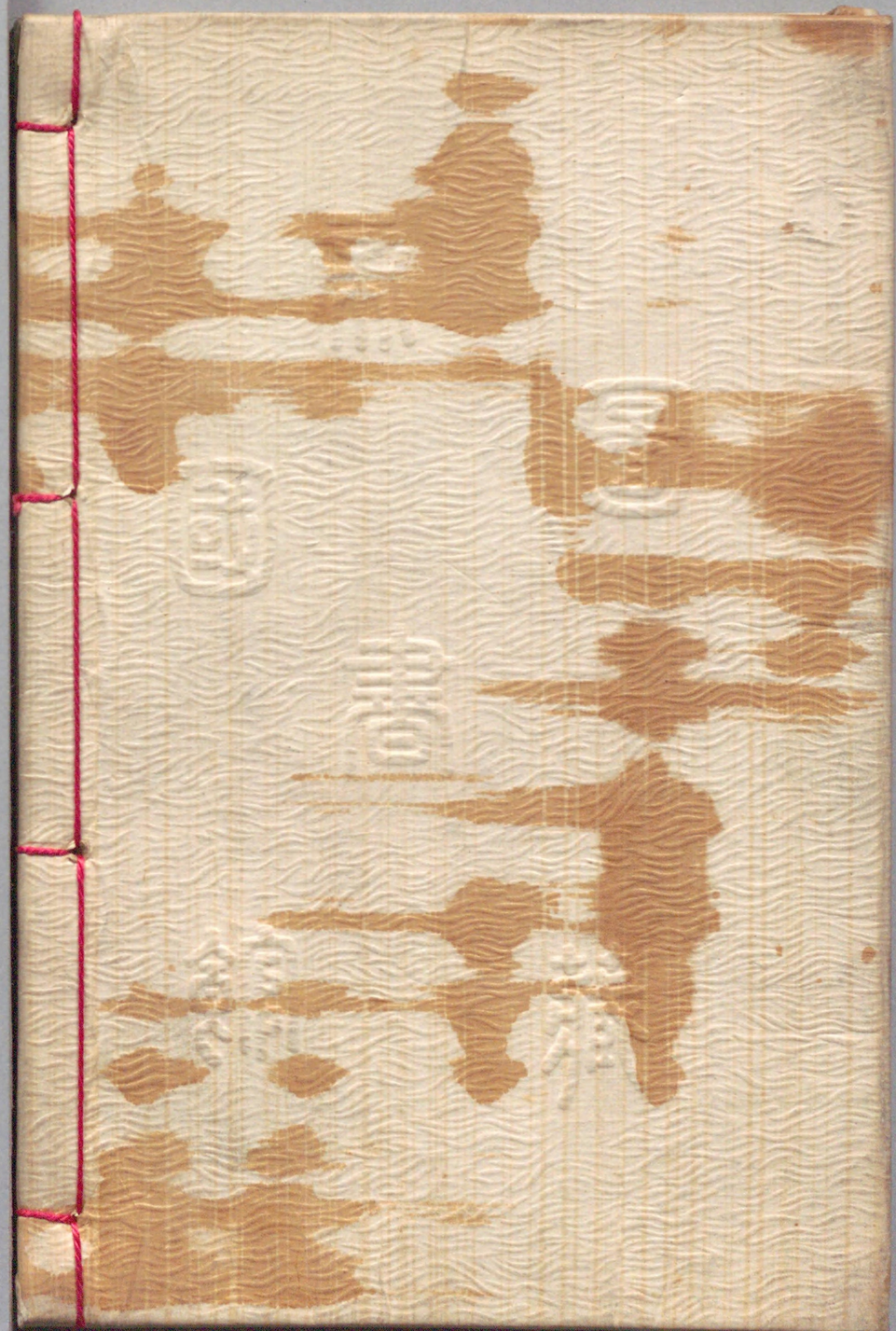
国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

208
15
693

国立国会図書館　　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用



国立国会図書館　　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用